

第11回定時総会 記念講演会

6月9日(木)、中経連は第11回定時総会を名古屋市内にて開催した。定時総会後、奈良大学文学部文化財学科教授、城郭考古学者の千田嘉博氏を講師に迎え、記念講演会を行った。講演要旨は以下のとおり。(第11回定時総会の概要は7・8月号にて掲載済み。)

演題 **城づくり 街づくり**
— 中部地域の文化をさぐる —

講師 奈良大学文学部文化財学科 教授
城郭考古学者 **千田 嘉博 氏**



【プロフィール】

愛知県出身、奈良大学文学部文化財学科卒、大阪大学博士(文学)、国立歴史民俗博物館考古研究部助教授、ドイツ・テュービンゲン大学客員教授を経て、2014年～2016年に奈良大学学長を歴任。中世・近世城郭の考古学的研究、日本各地の城の発掘調査・整備の委員など多数。著書・論文など多数。

中部の歴史と城づくり・街づくり

現代の我々がイメージする城の形は、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康といった中部を代表する戦国武将が、時代の変化や自身の考えにもとづき独自に発展させていき、最終的に全国へ広がったものといえる。

また、戦国時代から江戸時代の全国再統一の時代にかけて、中部出身の多くの武将が全国で中核都市の形成に携わり、現代に通じる各地域の特徴ともいえる街づくりや経済・文化の骨格を形成した。

この時代の城づくり・街づくりを理解することは、中部の文化の魅力や特色を知ること深く結びついている。

地方が繁栄した戦国時代

戦国時代以前の日本では、「京都」が文化やインフラの中心であり、全国のあらゆるモノや情報が集約されていた。

しかし、戦国時代になり、戦が頻発して地方の大名が力を持ちはじめると、「地域のものは地域のために使う」という思想が生まれ、京都集約的な仕組みが崩れていった。戦国時代は、戦が多いという負の面がある一方で、地域独自の経済や文化が色濃く形成される「地方の時代」だった。

織田信長が目指した社会と城づくり

中部出身で全国的に有名な信長はどのような社会を目指したのか、城づくりから読み解くことができる。まず、戦国時代初期の城づくりを見ると、信長が初期に拠点としていた清須城では、現在の城の象徴ともいえる天守は存在せず、従来の平地に巨大な武家屋敷を構え、周辺に有力家臣の館が分立・並列的に存在するという京都のスタイルで形成されている。

そして、各地の大名間で戦が大規模かつ頻繁に起きようになると、安全性・防衛性を考慮して、山城がつくられるようになった。当初の山城は、山の上に武家屋敷をつくって、周りに家臣が住むといった従来通りの並列的な構図だった。

信長がはじめて築城した小牧山城は、山城であるものの、従来の並列的な構図の城づくりを一新し、信長を中心とした組織を志向した階層的な構図の城づくりであることがわかる。

小牧山城は、信長が山上、家臣は中腹から麓に居住し、信長が住む本丸周辺にのみ石垣を使って防御を固め、家臣の住む屋敷周辺には石垣を使わないといった差別化した構図を採用することで、信長を唯一絶対の頂点とする格差を目に見える形で表現した。

この後に築城される岐阜城、安土城では、信長が考える自分中心の社会を具現化するため、さらに階層的な構図の城づくりを行っている。

岐阜城では、金華山の山頂に位置する山城を、信長が居住するプライベートな空間とし、家臣は麓に館を構えるという地理上の高低差を利用して圧倒的な家臣との格差を表現した。

続く安土城では、低い山一帯を利用し、周辺を高さ10m超の石垣で取り囲み、山の頂上には7階建ての天守を築くといった圧倒的なスケールの城づくりを行った。また、天守の上に当時では珍しい「シャチ」を載せるといった新たな権威の象徴を創造するなど、独自の文化を形成していった。

信長は、自分を唯一絶対の頂点として家臣の上に君臨する求心的かつ階層的な社会構造を目指し、それを小牧山城以降、安土城までの城づくりを通じて表現続けた。

明智光秀の目指した社会と城づくり

信長の家来として台頭した明智光秀はどのような社会を目指したのか。光秀が築城した京都の周山城を分析してみると、信長とは少し違った独自のスタイルを形成しているのがわかる。

周山城は、山頂に光秀が居住する天守があり、その周りには石垣を築いて守りを固めるという近世の城の構図であるものの、本丸の周囲にある尾根の先には、独立した小さな曲輪がいくつも配置されている。これは、自分がリーダーであるという信長のスタイルを踏襲しつつも、自らは唯一絶対の頂点ではなく、家臣の相対的な自立を承認する並立的な関係性を表していることがわかる。

また、光秀は「明智光秀家中軍法」を作成して、家臣の石高に応じて準備する兵員と武器を定めた合理的で公平・明確な軍役基準を示している。これは戦に勝ちながらも地域を持続・発展させるために必要なバランスを考えた規則ともいえる。光秀は、家臣に無理を強いない戦国時代における働き方改革を実践した。

戦国時代後期における城づくり・街づくり

信長亡き後、強大な権力を誇った秀吉は、信長の

思想を受け継ぎ、自らを唯一絶対とする階層的な城づくりを実践し、信長の安土城を超えるスケールで大坂城を完成させ、軍事拠点や権威の象徴としての城づくりをさらに発展させ、全国に広げていった。

その後、家康が天下統一を果たす頃には、際限のない軍拡を目的とした、これまで軍事拠点としての城づくりを行う必要がなくなってきたことから、軍事機能の簡略化を前提に政治拠点としての城づくりに様式を変えていった。

また、この頃の街全体の構図を見ると、中心部に天守を構えた城に領主である武士が存在し、それを囲むように家臣、町人、商人、寺院の順番に建屋が並ぶ極めて階層的な街の構図が全国各地で見られるようになった。これは同時期の世界と比較しても、特異的なものである。

たとえばヨーロッパの街の都市プランは、領主と宗教勢力が2大勢力として街の中心に並列的に拠点を構えていたのが一般的だが、日本では、武士が宗教勢力を圧倒したことから、宗教勢力は街の外縁に配置され、いざという時の戦の軍事拠点として役割を果たしていた。

全国の街づくりの基礎 小牧山城 城下町

街づくりの歴史をさかのぼると、平城京・平安京の時代には、街の中央に大路があり、両側には築地塀で仕切られている条坊制という構図が一般的だった。では、現代の我々がよく目にする長方形の街区と短冊形に地割を行った構図は、どのようにできたのか。信長が整備した小牧山城の城下町の設計が最初のモデルとなり、京都をはじめ全国各地に広がっていったと判明している。

このことを踏まえると、現在、全国各地で見られる「小京都」といわれる長方形・短冊形の構図をした地域は、「小小牧」に改めるのが正しいのではないだろうか。現代の街づくりの骨格となる全国各地の城下町のつくり方は、信長をはじめとする中部を起源として全国展開し、現代へと受け継がれていった。

(総務部 柳田 智之)

地域会員懇談会

中経連は、会員の皆様からの意見を今後の事業活動に生かすことを目的に、地域会員懇談会を下表の日程・都市で開催した。当日は、水野会長の挨拶に続き、事務局から今年度の主要事業活動について説明した後、意見交換を行った。参加者からの主な発言は以下のとおり。

開催日	開催都市	参加者
7月1日(金)三重地域会員懇談会	津市	水野会長、伊藤副会長、安藤(仁)副会長をはじめ20名
7月11日(月)岐阜地域会員懇談会	岐阜市	水野会長、村瀬副会長をはじめ21名
7月26日(火)長野地域会員懇談会	長野市	水野会長、碓井副会長、松下副会長、中村理事をはじめ10名

※静岡(8/23)、愛知(8/26・8/31)の地域会員懇談会については次号にて掲載予定

カーボンニュートラルの実現に向けた意見・要望

- 燃料費の高騰から原子力発電所の再稼働に目が向いているが、そこに留まらず、日本の核燃料サイクル確立に向けて本当の議論の必要性を感じる。中経連の主要施策にも盛り込んでいただきたい。〈三重〉
- 水素が石油に代わるエネルギー基盤になることが見込まれる中、これを潤沢に受けられる中部圏という全体像を中経連に構築いただきたい。〈三重〉
- 脱炭素が進むとエネルギーコストの上昇などが起こるため、産業構造の変化に意識を向けていく必要がある。水素・アンモニアはエネルギー密度が低く、運送負担が大きいことから、拠点が遠方にある多消費型の企業にとって効果的なものとは言い難い。〈三重〉



三十三銀行 岩間会長

観光に関する事例

- ツーリズム東美濃協議会では、「東美濃地酒・酒器振興事業」を展開している。地酒・酒器・郷土食という地域の産業・文化を組み合わせ、行政の枠を超えて広域連携で魅力を発信している(表紙・表紙裏:「未来につなぐ地域の文化」参照)。〈岐阜〉
- 長良川流域でのサステナブルツーリズムを観光

庁のモデル事業として進めている。新しい生活様式で定着した健康志向は重要な要素と考え、地元の病院・大学と提携して800kcalを切る和洋のコースメニュー開発に取り組んでいる。〈岐阜〉



岐阜グランドホテル 葛西社長

- グリーン・サステナブル・ゼロエミッションをキーワードに、飛騨周波数変換所や奥飛騨の中尾地熱発電所を舞台にインフラツーリズムを展開していく。一般の観光客だけではなく、ビジネスパーソン視察兼観光をビジネスモデルとし、地域活性化に貢献していきたい。〈岐阜〉

産学官連携に関する事例

- 岐阜薬科大学では、寄附講座を8つ持っており、中部薬品や三菱ケミカルなどの企業と5年以上連携を続けている。産学連携は、さまざまな企業と長期間にわたり継続することで、新しいものを生み出していくことができる。〈岐阜〉
- 当社では、岐阜大学構内に「航空宇宙生産技術開発センター」を設けている。産学が連携した航空宇宙の生産現場に関する施設はめずらしい。岐阜には技術やものづくりにおいても多くの宝があるので、さまざまな産業がタイアップして日本経済を元気にしていければと思っている。〈岐阜〉
- デジタル化の潮流の中で信州大学が果たす役割

として、「信州DX推進コンソーシアム」の立ち上げを提案し、県内11の自治体と13の企業が参画して7月に設立した。リスクリングやDX人材の育成などで、地域に貢献していきたい。〈長野〉



中経連 中村理事

IT・DX人材の育成、中小企業のリスクリング

- 中小企業はIT人材の不足からDXの推進に対して息切れ感がみられる。IT人材の育成には、行政による補助金やセミナーを頻繁に行うなど、実のある取り組みが必要。〈三重〉
- 人口減少が進み、企業における人材不足が課題となっている。それを補うため、デジタル化を進める必要があるがIT人材の育成は難しく、学校教育の段階から取り組みを進めていかなければならない。〈三重〉
- 当社では、エンジニアをつくるため、会社で高等

専門学校を立ち上げ、認可待ちの状況である。また、2年に1回ほど社内で使用するシステムを入れ替え、変化に対応できなければ業務が回らないという荒療治を行っている。〈岐阜〉

- 当社では、社長をはじめ社員全員がDXアカデミーというオンライン講座を受ける制度を設けている。〈岐阜〉

- 人材育成やリスクリングが特に中小企業で難しいと聞く。ITの導入などにより、なくなる仕事の代わりに、社員に別の仕事をさせるリスクリングのノウハウや費用を負担できないと躊躇するケースが見られるの



西日本電信電話
児玉岐阜支店長

- で、何か仕組みができないか。〈岐阜〉
- 従業員が数百名規模の製造業において、リスクリングの需要は少ないと思う。企業体質にもよるが、当社で自己啓発的なことに手をあげる従業員はまず見込めない。〈長野〉

(総務部 櫻井 景子)

静岡県との懇談会

7月14日(木)、中経連は静岡県との懇談会を静岡市内にて開催した。静岡県からは川勝知事、出野・森副知事をはじめ7名、中経連からは水野会長、中西・佐々木・中田・神野・碓井副会長をはじめ10名が参加した。

水野会長は、「デジタル化・DXの推進、カーボンニュートラル社会の実現、イノベーションの活発化など、単独では解決が困難な課題に産学官や地域間が連携して取り組むことによって相乗効果を生み出したい。中経連が『つなぎ役』となり、中部圏の持続的な発展に貢献していく」と述べた。

川勝知事は、「3月に新たな総合計画を策定し、県のビジョンである『富国・有徳の美しい“ふじのくに”の人づくり・富づくり』を、2年前倒しで完遂できるよう取り組んでいく」との考えを示した。

懇談では、デジタル化・DXの推進やカーボンニュートラルの実現に向けた中小企業への支援、理系分野における女性人材の育成と活躍促進、



県境を越えた生活圏域における地域政策のあり方、移住やUターンの促進、地域の活力向上による東京一極集中の是正などについて意見交換を行った。

(企画部 岡戸 信之)